

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00654

研究課題名(和文) 小林好日による東北方言通信調査資料の整備と分析

研究課題名(英文) Organize and analyze of data on Tohoku dialect research by Kobayashi Yoshiharu

研究代表者

竹田 晃子 (TAKEDA, Koko)

岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：60423993

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は1940年前後に小林好日によって実施された「東北方言通信調査票」の分析と整備である。この調査票は質的・量的に充実しており、昭和初期の方言を分析できる学問的利点は大きい。そこで、調査票を整理・入力し、現代の面接調査では得られない言語事実や方言史の解明を目指して、分析をおこなった。1年目は対象資料の現物整理と第一調査票の入力、2年目は第二調査票の入力と回答者データの整理、3年目は第三調査票の入力と地理情報の整理、4年目は入力データの点検と並行して、言語地図作成システムの技術的な問題を検討した。全期間を通じて、データを利用した研究発表と論文発表をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の方言学は明治末期から大正・昭和初期に最初の繁栄期を迎え、世界的にみても早い時期に国家的プロジェクト調査や個別地域の詳細調査が全国で行われ、貴重な調査報告が蓄積されてきたが、「東北方言通信調査」と同様、十分に分析されてきたわけではない。本研究は、小林好日による「東北方言通信調査票」約7,500冊を整理・入力することでこの貴重な調査データを後世へ引き継ぎつつ、現代の方言話者への面接調査では得られない言語事実や方言史を明らかにすることを目的として行ったものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to organize and linguistically analyze the "Tohoku Dialect Correspondence Research Materials" conducted around 1940. This survey is qualitatively and quantitatively substantial, and has the academic advantage of being able to analyze dialects in the early Showa period. Therefore, I entered the questionnaire and analyzed it with the aim of clarifying the linguistic facts and dialect history that cannot be obtained today. In the first year, I entered the data of the first questionnaire and organized the materials. In the second year, I entered the data of the second questionnaire and arranged the respondent data. In the third year, I entered the data of the third questionnaire and organized the geographic information. In the fourth year, I examined the technical problems of the linguistic mapping system while inspecting the input data. Oral presentations and paper presentations using data were conducted throughout the entire period.

研究分野：方言学、日本語学

キーワード：東北方言 語彙 文法 調査資料

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象である「東北方言通信調査」から80年が経とうとする現代では、日本全国で方言の衰退が顕著であり、伝統的方言の話者も、その記憶も、失われつつある。この先、いかに進歩した録音機器を用い、工夫を凝らした調査と分析を行ったとしても、この資料と同等の方言量が得られることは二度とないであろう。消滅を目前にした言語の貴重な記録資料として、この資料の本格的な分析と保存に取り組む必要がある。この資料を分析することで、現代の方言話者への調査では解明できなかった新たな言語事実を明らかにすることが期待される。

2. 研究の目的

本研究の目的は1940年前後に小林好日によって実施された「東北方言通信調査票」の分析と整備である。「東北方言通信調査」の332項目におよぶ調査項目は、方言や日本語の歴史的研究にとって重要な古い語形・表現や、他方言には見られない特徴的な語形・表現をねらって作成されている。語彙項目では古典文献や古文書類に現れるような古い語形が回答されており、文法項目では活用・品詞の承接関係・文法カテゴリー・表現法など、現代的観点から見ても重要な文法要素を押さえている。また、調査票が回収された地点数は、国立国語研究所『日本語地図』『方言文法全国地図』の人口地点密度・面積地点密度をはるかに上回っており、データの量的側面でも充実している。質的・量的に充実したデータを利用して昭和初期の方言を分析できる学問的利点は非常に大きい。そこで、このデータを、質的側面と量的側面の両方から分析を行い、これまで明らかにされてこなかった言語事象や歴史的变化を解明することを目指す。

3. 研究の方法

資料現物の整理とデータ入力を並行して行い、データ化が済んだ部分から検討を行いつつ、順次分析して論文化していくという方法をとった。

時間軸にそって述べると、1年目(2019年度)は第一調査票の入力、2年目(2020年度)は第二調査票の入力と回答者データの整理、3年目(2021年度)は第三調査票の入力と地理情報の整理、4年目(2023年度)は入力データの点検・整理と並行して、言語地図作成システムのプログラム等における現代的・技術的な問題を検討した。

項目別には、資料現物の整理とデータ入力を並行し、データ入力が済んだ部分から、データの質的検討・量的検討と分析に取り組むという手順を進めた。

データの検討の一環として、フェイスシートにあたる情報を取り出し、地点データを全体的に把握したうえで地理的情報について整理し、言語地図作成とその分析に備えた。

の分析においては、言語地図の機械的作成方法について具体的な検討を行った。特に言語地図の作成において、今後解決しなければならない課題として、言語地図作成システムのプログラム等における現代的・技術的な問題を整理した。また、既存の市販プログラムの利用や、新たなプログラムの開発等を検討し、引き続き検討することとした。

しかし、現物資料の整理については、1年目の途中で諦めざるを得ず、今後の課題となっている。資料保管場所で現物調査票を閲覧したり整理したりする必要があったが、2020年から2022年までの間、新型コロナウイルス流行にともなう社会状況で、都道府県をまたぐ移動や滞在が困難になっていたためである。

4. 研究成果

本研究課題において発表した主な研究成果には、次のような口頭発表・資料展示・論文・図書がある。

資料の全体概要や現代的価値を紹介したもの

公開展示「小林好日博士の東北方言調査の資料、東日本大震災における方言をめぐる活動の紹介」(竹田晃子・小林隆・今村かほる・大野眞男・杉本妙子・東北大学方言研究センター、日本方言研究会第109回研究発表会・2019年)

公開展示報告「小林好日博士の東北方言調査の資料、東日本大震災における方言をめぐる活動の紹介」(竹田晃子・小林隆ほか、『方言の研究』6、日本方言研究会・2020年)

発表「日本方言データベース(DDJ)」の概要(小林隆、シンポジウム「日本方言データベース」の構築と公開に向けて)、東北大学方言研究センター・2023年)

発表「東北地方方言分布調査データベースへの招待」(竹田晃子、シンポジウム「日本方言データベース」の構築と公開に向けて)、東北大学方言研究センター・2023年)

○具体的な項目や記述を分析したもの

論文「『天保十五年伊勢参宮二月吉日』に見られる音声の方言的特徴について」(作田将三郎、『旭川国文』32・2019年)

発表「近代日本方言研究史にみるアイデンティティ」(竹田晃子、ひと・ことばフォーラム29「テ

- ーマ：言語とアイデンティティ』、東洋大学・2019年)
- 図書刊行物『東北方言における述部文法形式』(竹田晃子、ひつじ書房・2020年)
- 論文「推量・意志・勧誘・命令表現の形式」(竹田晃子、東北大学方言研究センター編『生活を伝える方言会話：宮城県気仙沼市・名取市方言』ひつじ書房・2019年)
- 論文「仙台藩・旧仙台藩領における近世以降の 車前草 の地方語史」(作田将三郎、『国語学研究』59・2020年)
- 発表「東北方言における条件表現の形式：近代の方言変化を読み解く」(竹田晃子、NINJAL シンポジウム：日本語文法研究のフロンティア 日本の言語・方言の対照研究を中心に ・2021年度)
- 発表「宮沢賢治作品と同時期方言資料の比較：オノマトペを中心に」(竹田晃子、2021年度宮沢賢治学会イーハトーブセンター夏季セミナー・2021年)

(以上)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹田晃子・有働玲子	4. 巻 20
2. 論文標題 昭和20・30年代の文集にみることばと表現	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生涯学習研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林隆	4. 巻 98-6
2. 論文標題 発話態度の地域差 - 自己と話し手、自己と他者 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 3-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鍵水兼貴	4. 巻 9
2. 論文標題 広がる関西弁～国語研の調査データを使ってみよう～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ことばの波止場	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鍵水兼貴	4. 巻 40-2
2. 論文標題 「国語に関する世論調査」に見る属性差	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 116-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 作田将三郎	4. 巻 59
2. 論文標題 仙台藩・旧仙台藩領における近世以降の 車前草 の地方語史	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語学研究	6. 最初と最後の頁 288-301
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鍾水兼貴	4. 巻 9
2. 論文標題 広がる関西弁～国語研の調査データを使ってみよう～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ことばの波止場	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹田晃子	4. 巻 173
2. 論文標題 災害時の方言とコミュニケーション：日本語教育と方言研究の連携のために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語教育	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 作田将三郎	4. 巻 32
2. 論文標題 『天保十五年伊勢参宮二月吉日』に見られる音声の方言的特徴について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 旭川国文	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹田晃子・小林隆・今村かほる・大野眞男・杉本妙子・東北大学方言研究センター	4. 巻 6
2. 論文標題 小林好日博士の東北方言調査の資料，東日本大震災における方言をめぐる活動の紹介	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 149-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林隆	4. 巻 8
2. 論文標題 感動詞の運用の地域差：東北と近畿の違いについて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 49-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 7件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小野正弘・竹田晃子・川崎めぐみ
2. 発表標題 オノマトペ認定の差異とその基準：宮澤賢治「なめとこ山の熊」を題材に
3. 学会等名 日本語学会2021年度秋季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹田晃子
2. 発表標題 宮沢賢治作品と同時期方言資料の比較：オノマトペを中心に
3. 学会等名 2021年度宮沢賢治学会イーハトーブセンター・夏季セミナー（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹田晃子
2. 発表標題 東北方言における条件表現の形式 近代の方言変化を読み解く
3. 学会等名 NINJALシンポジウム：日本語文法研究のフロンティアー日本の言語・方言の対照研究を中心にー（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林隆
2. 発表標題 方言地理学の課題 - 佐藤亮一氏の業績をもとに -
3. 学会等名 LAS科研2020年度末研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鐘水兼貴
2. 発表標題 2003年の日本の言語政策 国立国語研究所「自治体調査」データの公開
3. 学会等名 日本言語政策学会第22回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹田晃子・小林隆・今村かほる・大野眞男・杉本妙子・東北大学方言研究センター
2. 発表標題 公開展示「小林好日博士の東北方言調査の資料，東日本大震災における方言をめぐる活動の紹介」
3. 学会等名 日本方言研究会第109回研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹田晃子
2. 発表標題 近代日本方言研究史にみるアイデンティティ
3. 学会等名 ひと・ことばフォーラム29「テーマ：言語とアイデンティティ」（東洋大学）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林隆
2. 発表標題 「日本方言データベース（DDJ）」の概要
3. 学会等名 シンポジウム「「日本方言データベース（DDJ）」の構築と公開に向けて（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 竹田晃子
2. 発表標題 東北地方方言分布調査データベースへの招待
3. 学会等名 シンポジウム「「日本方言データベース（DDJ）」の構築と公開に向けて（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 友定賢治編 / 井上優、金田純平、金水敏、小林隆、定延利之、富樫純一、友定賢治、中西太郎・林青樺、仁科陽江、野田尚史、森山卓郎、楊虹、羅希、劉伝霞・有元光彦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 感動詞研究の展開	

1. 著者名 大野眞男・杉本妙子編 / 大野眞男、杉本妙子、児玉忠、小林初夫、札埜和男、佐藤高司、加藤和夫、今村かほる、竹田晃子、小島聡子、山浦玄嗣、三樹陽介、茂手木清、金田章宏、山田敏弘、菊秀史、中本謙、小林隆、内間早俊、坂喜美佳、佐藤亜実、小原雄次郎、櫛引祐希子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 326
3. 書名 実践方言学講座2・方言の教育と継承	

1. 著者名 小林隆・今村かほる編 / 友定賢治、岩城裕之、今村かほる、札埜和男、津田智史、小林隆、二階堂整、村上敬一、櫛引祐希子、半沢康、本多真史、後藤典子、中島祥子、武田拓	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 271
3. 書名 実践方言学講座3・人間を支える方言	

1. 著者名 小林隆編 / 井上文子、尾崎喜光、櫛引祐希子、熊谷智子、小林隆、佐藤亜実、椎名渉子、篠崎晃一、竹田晃子、津田智史、中西太郎、松田美香	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 345
3. 書名 全国調査による言語行動の方言学	

1. 著者名 竹田晃子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 東北方言における述部文法形式	

1. 著者名 小林隆 編 / 有元光彦、勝又琴那、川崎めぐみ、櫛引祐希子、小林隆、坂喜美佳、作田将三郎、椎名涉子、竹田晃子、田附敏尚、津田智史、友定賢治、中西太郎、舩木礼子、松田美香	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 386
3. 書名 全国調査による感動詞の方言学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小林 隆 (Kobayashi Takashi) (00161993)	東北大学・文学研究科・教授 (11301)	
研究分担者	大木 一夫 (OKI Kazuo) (00250647)	東北大学・文学研究科・教授 (11301)	
研究分担者	作田 将三郎 (SAKUTA Shozaburo) (30566021)	鳥取大学・地域学部・准教授 (15101)	
研究分担者	鎌水 兼貴 (YARIMIZU Kanetaka) (20415615)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・プロジェクト非常勤研究員 (62618)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------